

デジタル放送研究会第10回勉強会

平成18年3月23日

藤 吉： どうも皆さん、お集まり、ありがとうございました。本日は時間になっておりますけれども、まだお集まりじゃない方もおりますが、船の出る時間がありますので、時間通り始めたいと思います。今日は天野さんのお骨折りで、大変魅力的な講師、お二方をお願いしてあります。お二人がどういう方かというご紹介は、今までの案内にお任せして、早速講演のほうに入っていただきたいと思います。最初はそれでは、千葉さんをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

千葉氏の講演（別冊）

藤 吉： 非常に多岐にわたるお話でしたけれども、質問、何でもこの機会に、いかがでしょうか。

天 野： 質問するとき、お名前を。

大 里： 大里と申します。情報学会ではなくて、地盤工学会というところで、千葉さんにいろいろお世話になっていきます。ひとつ質問があります。2000年三宅島噴火の当時、「ひとりごと」以外にも、「三宅島観光協会」の掲示板など、多数の掲示板がありました。しかし、8月29日に火砕流が発生したときなど、特に「ひとりごと」に、いろいろな意見が集中する現象が起こりました。情報提供する側からみれば、他の掲示板もいくらでもあったにもかかわらず、なぜ「ひとりごと」だけに情報が集中したのか。その理由が前から分かっていません。千葉さんはなぜだったと考えていますか。

千 葉： 当時、書き込んでくれた三宅島の人にいろいろ聞いたのですが、「ひとりごと」に書き込むと、かならず誰かが答えてくれる点がよかったという意見がありました。わからないことを書き込んで、すぐに反応がある、ということを繰り返す中で、いろんな意見に触れることができる。いろんな人に感化されて、学ぶことができた。わからないことは、あそこに書くといいと。たとえば、屋根にコンコンって何かがあたる音がする、小石が当たったと思った、でも指で押したらつぶれたと書く、そしたら、それは豆石っていうんだと、いう情報が書き込まれる。ガスは危ないから、水でぬらしたタオルを用意したほうがいいとか、小石は頭に当たると危ないから、表に出るなとか。そういう、打てば響くような情報交換が可能だった。三宅島には、「ホームドクターの火山学者」が、残念ながら住んではいなかった。誰かに質問したくても、いなかった。でも、インターネット上の「ひとりごと」という掲示板があって、その空間に投げいれると、専門家から何か情報が返ってくる。そのところの反応が、早かった、敏感だったということが、理由のひとつだと思います。

天 野： すみません、天野ですけれども、ちょっと割と特殊なケースだと私は思っていて、というのは千葉さんが三宅島自体に詳しいし、それから災害の形態が火山だと。

火山の専門家であるということの評価があって、ここが一番、そういう意味では信頼性が高いし、火山の話題だったら千葉さんに聞いてみようっていうのが、割と多いと思うんですね。これが水害だとか違う災害になったら、またそれぞれバラバラにばらけてくるということになりますよね。

千葉： そうですね。浅間のときは、まえちゃんネット火山情報掲示板というところで、やはり同様の現象、一般市民の方から多数の書き込みがあって、専門家がそれに応答するということがありました。

天野： 今、中越の地震災害にしてもそうだし、宮崎市の掲示板なんかもありました。ほかの災害になると、どこの掲示板に行けば一番いい情報に行き当たるのかが、もう分からなくなってしまうような気がするんですけど。その辺は、千葉さんとしては、今後、同じようなことがあれば、また同じように対応するという事なんでしょうか。

千葉： それは、来るものは拒まずです。誰かが書き込んで、みんなでワーツと書いたら、もう止められない、リアルタイムの管理が必要になる。かといって、こういう内容について書いてくださいと誘導して、みなさん来てくださってと言っても、なかなか来てくれるものでもない。コントロールするのは容易じゃない。これからも、何らかの災害に際して、どこかの掲示板に発言が集中して、それをみんなが察知して集まる、ということじゃないのかなと思います。ついこの間も、さる大臣だかのブログが炎上、大変な量の書き込みで溢れて、勤務時間中に火消しに追われる事態となった。それが周知のこととなり、なにをしているのかと批判された。私の実感としては、現実には掲示板やブログが炎上したら、とても放置できない。それは緊急事態であって、優先的に対応せざるを得ないと思います。掲示板の管理運営というのは、業務として誰かに頼まれてお金をもらってやっているのではなく、個人の責任において行っていることが多いので、オンタイムな対応には微妙な問題があります。

話は違いますが、8月29日の低温型火砕流の写真、あれは撮影時刻が朝5時だったんですけど、何でそんな時刻にそこにいたのかといえば、仕事で三宅島に行っていたわけで、着いたばかりだったのです。一般的には、仕事で現場に行ってお撮った写真は、仕事を頼んだところのものになります。たまたま、あの火砕流の発生時刻は朝の5時だった。要するに、勤務時間前だった。だから、火山活動情報として重要でもあるし、問題ないだろうと個人的に判断して、掲示板にアップしたわけです。もし、あの火砕流の発生時刻が、午前11時だったら、映像をどう扱ったのか、もし、昼休みだったらという、微妙な問題は確かにあった。その時、まず情報を公開することが重要という緊急判断をしたわけです。それも、たまたま、フィルムが切れてデジカメで撮影していたからできたわけで、フィルムだったら翌日までアップできなかった。そういう偶然も幸いしたということはありません。

す。

千 川： 大妻女子大の千川です。三宅島については、千葉さんの掲示板も見せていただいたんですけど、主に見ていたのは「島魂 三宅島ネット」などでした。また実際に流れる情報量も、掲示板よりもメーリングリストのほうが、圧倒的に多かった。しかし、きちんとした形で残っていないので、ある意味で地下水脈みたいなものということになるのでしょうか。こういう現象は、有珠山噴火の時の「有珠山 ML」もそうでした。社会的に影響をどれくらい与えたのかという意味では、実は、メーリングリストでの情報のやりとりが、おおきなウエイトを占めていたのではないかと思います。三宅島 ML は、三宅島噴火が起きてから、避難直前ぐらいまで、大体2カ月ぐらいにわたって活発化していました。三宅島 ML に流れた情報が千葉さんの掲示板に掲載されたり、そこでの反応がまた ML に流れたりとか、そういう情報交換もありました。情報のやり取りが、掲示板だけではなかったということを、強調しておきたいと思います。

千 葉： そうですね、三宅島 ML で流れた内容が天声人語に転載されたこともありました。

千 川： 確かに当時のメーリングリストでは、なにか発言するとむちゃくちゃに叩かれたり、誹謗中傷されたりと、いろいろな問題がありました。ML はいったん流されたものは削除することはできない、しかし掲示板のように、過去ログがないので、古い発言はどんどん流れていってしまっ見えなくなるという点があります。ML と掲示板にはそういう違いがある。掲示板でもあのように書き込みが集中すると、そこを管理している人たちにとっては、すごく御苦労も多かったのだらうと思います。

三宅島についての情報のなかでも、島民の人たちにとってみれば、火山がどういうふうに今活動していて、今後どうなってくるかというのが、重要な情報であるわけです。これまで6回にわたって、私が学生やボランティアの人たちと一緒に三宅島の避難者の人たちを対象に発行していた情報紙「アカコッコ 三宅・多摩だより」の読者の調査を行ってきていますが、その調査からわかったことは、三宅島の人たちがとにかく一番欲しいのは、三宅島の火山活動についての情報であり、次に、行政がどのような対策を取ってくれるのかという情報であります。その点は、噴火してから今まで、変わっていない。そういう意味で、千葉さんの掲示板っていうのは、すごく重要なものであった。もちろん、今でも多分重要だろうと思うのですけれども。一つ質問ですが、10月のところで、すごく発言数が伸びていますが、それはどうしてなのでしょう。

千 葉： ここは9月上旬の全島避難で、その後ですから、火山ガスについての議論があった頃です。火山ガス、これは一体何なのだ、島中の水溜りが変色しているぞと。これはどういう害があるのかということで、東北大学の先生をはじめ、全国各地から市民や専門家の方から書き込みがあって活発な議論があった時期です。三宅島

からの書き込みがいちばん多かった時期のちょっと後です。

千 川： あと、もう一点ですが、三宅島の島民で、当時インターネットにアクセスして、掲示板を見たり、書き込みが直接できた人っていうのは、かなり限られていたと思います。一部の、業務で掲示板とかホームページを扱っている方たちは使えたけども、そうではない、一般の島民の方で使えた人は非常に少なかったと思います。実際に、11月くらいから、避難先の東京都の方で、島民の方にパソコンを配って、ネットにつないでもらって、離れている中でいろんな連絡を取ろうと活動をしました。あれはまたそれでいろいろがんばったんですが、なかなか一朝一夕にはいかないということもあったようでした。そういう中ではありましたが、掲示板っていうのは、島民の人にとっては非常にありがたかったとおもいます。また千葉さん以外のいろいろな方が情報や意見を出してくれるんで、そういう点がすごくありがたかった。

問題は、そういうネット上の情報がどうやって島民に伝えられたかですね。新聞の販売店の方が、ピラを印刷して新聞に折り込みで配ったということがありました。そういった紙ベースでの情報っていうのは、やっぱり重要だと思うんですけどね。

千 葉： そうですね。直接、ネット上で目にした人の数はあまり多くは無かったというのはそのとおりだと思います。毎日プリントアウトして、役場に山積みにして、置いたんだという話も聞いています。

平 塚： ちょっといいですか…。私、やっぱり一番興味を持ったのは、削除。ちょっとね、今、初めて、サポート部隊という話を聞いた。何を削除するのか、だれがどうやって削除したのか、サポート部隊だったのか、その辺の具体的な話を聞きたいですね。

千 葉： 発言が徐々に増えてきて、最初に困ったなあと思ったのは、バックアップが間に合わなくなったことですね。それこそ三宅島に出張にいたりする中で運営しているものだから、1日の書き込みが100を超えるようになったときに、困った。掲示板の最大保存数は100だったので100ぐらいつつバックアップしないと、消えてしまうんです。苦し紛れに、掲示板に、バックアップをしてくれる人を募集と書いた。そのときに、何人かからありがたい申し出があった。その中に、のちのち大変お世話になる Hal.T さんもいて、自前のサーバー提供しますと、自動でどんどんバックアップしますという申し出があった。それがサポート部隊の始まりでした。その後、サーバーの移転や独自ドメインの取得などでもお世話になっています。削除のほうは、ちょっと手の届かない人をお願いしてもあれだったので、基本的に近隣の火山関係メンバーで対応しました。削除権限を委譲したり、現場にいるときに掲示板に変な書き込みがあって、削除するかどうかを携帯で読み上げてもらって、「どうします」とかいう感じで判断をしたこともありました。

もしかすると、それは本当のことかもしれないから、削除はちょっと待ってということもありました。それは、実は牛が死んだだけじゃなくて、人も死んだんだっていう書き込みだったんですが、ちょっと本当かなって、一瞬思いますよね。すぐに消さずに、ちょっと1時間ぐらい置いてもらったこともありました。うそか本当かを即断できない微妙な情報があったときに、ちょっと置くと、いろんな人から意見が来て、それで多数決みたいにしたこともあります。というのは、一度削除すると、すぐ復活は普通できない。あと、こんなこともありました。削除された発言を復活して読みたいという人が集まって、ひとりごと削除発言復活プロジェクトチームっていうのを何か勝手につくられまして・・・、私も後から参加したんですが、削除した張本人が保存していないから困ったわけですが・・・。でも、みんなバラバラですがデータを結構保存してて、それを持ち寄れば、とにかく削除したものが、全部復活できるんじゃないかということでした。そういうパスワードで保護された掲示板を使いながら、完璧なアーカイブを残そうとしたわけですが、だいぶ復活できましたが、自己削除なんかは残っていないものが多いですね。その削除された「デマ」が一体どういうものだったのかというのは、やっぱり今にして思えば、大変興味深いことなんですね。誰が書いたのかについてはわからない。後から話を聞くと、実は私が書きましたってのもありましたけれども、よく分からないですね。

天 野： いわゆるメディアとかジャーナリズムの話は、また引き続き平塚先生にやっていただくとして、この間、長野にデジ研で調査に行かれて、地元の方は、ニュースで伝えられているほど、豪雪の被害に、悲惨な目に遭っていないと、やはりギャップがあるという感想を確か...

田 代： まあ報道、もちろん困ってはいらっしゃるのですけれども、そこまでは困ってないよという、普通には生活してますというような感じの意見ですね。

天 野： そうですね。今、田代さんも、そういうことで拾ってきたんですが、いわゆる今、千葉さんがやられているようなものは、そういう意味の報道に値する、値しない、みたいなところでいくと、どうかということと、それから住民の声をみんなに知ってもらう分にはいいんじゃないかとか、その辺のレベルというか、どの辺に位置するもの、インターネットの掲示板っていうのは、どの辺に位置するものなのかなというのを、見解があれば。

千 葉： 掲示板は、管理者が管理できるといっても削除だけで編集権限はありません。影響力が大きいとはいえ、マスメディアというものには程遠いと思います。一方で、最近、ブログというものが随分増えてきて、掲示板の位置付けも徐々に変わってきたように思います。メールを勤務時間中にやりとりしても、何も言われななくても、同じ情報でも掲示板やブログを通してやり取りしていると、仕事とは関係ないように思われる。掲示板は、同好会、趣味で利用するものだという固定

観念があるのかも知れません。掲示板というのは単に様式というかネット上のシステムの一つに過ぎないわけで、メールよりも技術的にはずいぶん進んでいるし、ブログは掲示板がさらに進化したものかもしれません。掲示板を利用して、ビジネスもできるし、ものすごく重たい内容を議論するのにだって使えるわけです。もう少し理解されてもいいと感じることがあります。

掲示板の最近の状況ですが、いわゆるあらしというものはほとんどありません。ログを見ると、プロバイダを除けば大学とか研究機関からのアクセスが一番多いです。しかし、大半の人はほとんど書いてこない。見るだけ、ロムってやつですね。平常時には、実際 IP さらして書き込みにくいですからそんなものでしょう。しかし、時々心配になります。実際、緊急時に、そういう専門家が鋭いコメントを本当に書いてくれるのか。全部の板には書けないだろうから、選んで書くのか。縦割りでいっぱい掲示板できたりすると、何々関係はここにしてくださいとか、ということにならないか。情報の分散は良くないなあという気がちょっとしてるんですけどね。また、別の言い方をすると、あらかじめ、ここに誰が来るっていうのが分かってないと、質問も書けないですよ。

渡 部： 千葉さんのところは、やっぱりちゃんとした常連さんがいるってのは非常に大きかった。

千 葉： そうですね。常連がいるのが見えてた。　　さんが、ここを見ているっていうのはあったですね。かなり専門的な質問について、国内でいちばん詳しい先生から直接レスがあったりしました。

渡 部： コメントみたいなものなんですけれども・・・、やっぱり千葉さんのこの「ひとりごと」掲示板の、ほかにはない特色というのは、やっぱりホットスタンバイってところだと思います。何も無いときにも、きちんと機能しているという点です。例えばついこの間なんか、あの衛星はどうだとか、あとは、火星まで行くのかとか、あるいはNASA でいい画像が転がったから壁紙にどうぞとか、そういうのが平時からあるわけです。そうすると、大気の専門家も来ていれば、電磁波の専門家も来る、見ている人の誰かはよく分かっている。災害と災害の間にも、ちゃんとやっているとこがいい。

最近になって、情報をやりとりする回線はずいぶん増えたけれども、平時から機能していなければ、その場所がわからないわけです。いざ、災害というときになって、誰も書き込まないのではないかという危惧がある。そういう問題の、非常に分かりやすい裏返しになってるんだと思うんですね。情報工学の時間に、一番最初に習うように、情報っていうものに対して、ホットスタンバイでいるための、いろんな要件を本当に偶然か必然か、ある意味で必然的に持って備えられてるところが、本当に長く続けられている理由だと思います。しかも、興味のある人が、その興味に基づいて、やっているわけで、義務感とか仕事とかでは

ない。掲示板にしても、それからメーリングリストにしても、やっぱりボランティア活動なんかもそうなんですけれども、義務とかそういうふうになってしまうと、なかなか見てるほうもだんだんつらくなるんです。やっぱり見てて、見てるほうもプレッシャーでなくて、書くほうもひょっとすると、暗黙に求められてるんじゃないかということになる。そういうものについて、前向きな形で書き込んでいける雰囲気の状態みたいなところのプロデューサーとして、千葉さん、効果は大きいのかなというふうにちょっと思いましたけどね。

千葉： ホットスタンプっていうことばは、非常に私の持っているイメージとは非常に近いです。

渡部： どうしても、学会系の ML とか、学会系の掲示板、いろいろありますけれども、やっぱりおちゃらげがないのがいけない。次に学会あったときに、怒られちゃったり。いろいろ、ましてや業務時間中にとかっていう差し障りがあるんだけど、そこはとにかく、うまいバランスっていうか、あとは書き込みのレベルの高度さと敷居の低さと、何か非常にゲームバランスの妙っていうか、そこらあたりが本当に偶然必然、よく分からないんですけども、うまいバランスでいられて、時代の変遷、まさにインターネットの参加者が急激に、98年から比べますと急激に増えてるわけで、一方で「2ちゃん」とかが出てきて、ブログブームが出てきたにもかかわらず、ここの運営自体は、極めてニフティーサブみたいなときから比べても、あまり変わらないままで進んでるという部分に、何か情報開示とは別のエリアの、ヒューマンウエアみたいなネットワークの力強さとか根強さっていうのがあるからこそ、うまくいってるんじゃないかな。

千葉： バーチャルな世界だけじゃなくて、実際いろいろ会って、顔が見える関係の中で続いているっていうのも一つあると思うんですけどね。

松本： NHKの松本といいます。三宅島の当時の話なんですけど、火山活動がだんだん活発になって、18日に大きな噴火、29日に低温火砕流、そういう流れの中で、火山学者のひとりごと、千葉さんのページが、かなり島民の人たちに影響を与えたと思うんですね。それで、それは感覚的に分かるんですけど、島内の世論の形成っていうか、どんなふうに影響を与えていったかという、何か具体的な根拠とか、そういう経験。例えば、当時島の中にあるパソコンの台数っていうの、そんなにももちろん一人一台は無かったと思うんですけど、多分、中に地域の活動に熱心な方たちが、例えばその掲示板を見て、口コミで伝えていったり、そんな多分連鎖があったと思うんですけど、例えばパソコン、ページのビューの回数の記録とか、あるいは具体的に、こんなふうに情報が伝わって行って、村議会議員の質問につながったとか、そういう傍証みたいなものはないのでしょうか。

千葉： ページビューについては、当時、自前サーバーではなく記録がなかったもので、正確な数値は分かりません。ただし、「ひとりごと」にリンクを張った人のとこ

るに、1日1万近いアクセスがあったというのと、バックナンバーのページにアクセスが殺到して、サーバーが止まったということがありまして、その割合から推定すると、おそらく1日10万ヒット程度になるから、それ以上はあったらろうというのが一つですね。それとあと、実際の伝達のほうですが、後日、何人かの島の人からいろいろ聞いた話では、口コミももちろんあったけど、プリントアウトしたという話を聞いています。具体的に数字で裏付けられるようなものではないのですが。

平塚： 実際、紙に印刷した。新聞みたいな感じですね。「ひとりごと」をプリントアウト。それを会議室、とか集会所みたいなところで。

千葉： 役場のカウンターに山積みにしてあって、みんな取りに行ったんだっていうことは聞きました。

藤吉： なかなかいつもきりがなく、続けたいところなんですけれども、5分間休憩して、平塚さんのご講演に移りたいと思います。どうもありがとうございました。

休憩・平塚氏の講演（録音記録無し）